

猫のいる風景 全編100枚書き下ろし予定

第三話 赤毛の少年

たなか 踏基

400字詰原稿用紙 全編100枚書き下ろし

平成十七年十月十七日脱稿

緑陰や猫跨ぎある犬薄荷・踏基

一般的に、バイリンガル(二つの言語を使う能力)環境で一定レベル以上言葉を使える子供は、単一言語で学んだ子供より、一般的な認知能力や感受性が高いと言われている。

その環境下に置かれれば、単純な日常的なコミュニケーション能力は誰でも身に着いて、自然に第二言語を学べると良く言われる。だが言葉の質量を確保し、動機付けさえ上手く行けば、子供の認知、思考を支える言語能力は著しく向上する。小さい子供は、将来でなく「今楽しい」「今面白い」が最重要である。現地の治安が不安ということ、日本人コミュニケーション内で暮らした子供の言語能力は、日本だけで暮らした場合と左程変わらないという。

赤毛の少年トーシャ(敏夫)は、日本生まれのドイツ育ち、今でいう帰国子女である。

赤毛の少年トーシャ(敏夫)の場合、日本とドイツを繋ぐ懸け橋となったのは、一匹の白いペルシャ猫の「ミーシャ」であった。

曇天の遅い信州松本の初夏は、静かだった。

小石をぼんと空に放り上げただけで、その静かさが破壊されてしまふかと思わせた。その静かさの底に沈殿してくる、息苦しい衝動に少年トーシャ(敏夫)は気付かずじっとした。

信州松本の初夏は、六月に入ると父親の姉世話になつて同居の叔母の下宿の窓から遠くに見える測候所の道を遡りながら、何時ものように今年も確実にやってきていた。城を見通せる小道の端を右折して、白い測候所の門脇まで、道沿いに植えられた細い木々の芽吹きに、その兆しが読めたからである。

この辺り一体は、通称松本の文化村と呼ばれ、大学関係者、高校教師、画家、音楽家、医者や外国人が住む文教地域であった。

日本国籍のある赤毛の少年トーシャ(敏夫)が、松本の中学校に転入生として単身帰国したのは、十二歳になった時であった。家族特に父親が心配した高校への進学は、事前に準備していたこともあつて比較的問題なく推移した。

父親の郷里、松本F高校には、当時の日本の英語教育一辺倒の時代に珍しくドイツ語を教える学級があつた。帰国子女に起りがちな、言葉

の障害は、日本で生まれ四歳まで日本に居て、ドイツに渡つての生活は八年間であつたので、第一言語の日本語を忘れていなかった。でも、少年トーシャ(敏夫)にとって、ここ二年余りの信州の初夏は、良い季節ではなかつた。

先ず松本の中学生生活、高校進学後のカルチャーショックが尾を引き、あまり精神状態は良くなかつたからだ。ドイツ人母と日本人父の血をひく少年トーシャ(敏夫)が、単身帰国後のここ信州松本の静かな初夏に、同級生や付近住民から好奇の目で迎えられたからではない。

生物にとって春から夏は、明日への命をみなぎらせて性が芽生え、予感と期待に弾む季節であり、活動を約束する季節であつたとしても、ドイツから単身帰国の少年トーシャ(敏夫)の場合は、身裡から湧き上がってくる得体の知れぬ臆なる混血の魂、ドイツ人の母譲りの狩猟民族の血に困惑する季節であつたからである。それが若さというものならば、その若さを持って余していったと言つてもよい。

初夏のある日、赤毛の少年トーシャ(敏夫)は、苦手の数学の復習に飽いて、本から目を上げ窓ガラスの上を懸命に飛び廻る日本の小虫を目で追っていた。身体のわりに足が長く、羽根も長い小虫だった。その小虫は引き下がることを知らず、ガラスの壁を撫でるように衝突するだけで、己の前進を拒む物体を理解できないでいた。

その長い足は何度もばたばたと空を掻き、身

体を空中に浮かべるための羽根も、ガラスの冷たい感触のまえでは浮力すら減退させた。

しかし、小虫は、何時までも無知のまま猛進しやがて前進の力がみなぎった時に、その物体を突き破って外に出られるのだと信じて疑いがないのごとく行動した。

窓は半分開いていた。だが小虫はそこに行き着けなかった。一度ガラスの面を這って窓の棧まできて、そこを飛び越せば前進を阻む物体が無いにもかかわらず、また好んで前のガラスの面に戻ってしまった。

赤毛の少年トーシャ（敏夫）は、小虫をみている内に何故か焦燥感に駆られた。

それは、小虫の焦燥感が少年トーシャ（敏夫）に感染したというのではなく、自分の内部から湧き出した自分自身の焦燥感といったもよかった。棧を越えれば、自由になるではないか、何故自ら好んでそのガラス面を舐めるように戻ってくるのだ!!

小虫はなおも空を掻いた。

机に向かってじっと眺めていたトーシャ（敏夫）は、立上って窓を大きく開けその小虫を開放してやろうと思った。小虫の徒労の連続に同情したのかもしれない。本当は小虫の徒労は、赤毛の少年トーシャ（敏夫）の徒労と別次元にあったのだが・・・

その瞬間!?

小虫は、残虐な混血少年の指先でたわいもなく圧死していた。小虫の死体を窓から捨てると、一つ大きく伸びをして、愛用の「ヤッ

ケ」(ドイツのジャンパーのようなもの)を羽織ってトーシャ（敏夫）は散歩にでた。国立松本結核療養所のある城山に続く散歩コースが、ドイツの小高い森や丘に似ていたのは兎に角大きな救いだだった。

デュッセルドルフの中心街はライン河の右岸にあり、昭和四十六年(一九七二)開校の日本人学校は、左岸のオーバーカッセル地区にあった教会の付属建物カニージハウスを仮校舎にして発足した。

当初は、僅か四十名ほどの生徒数であったが、日本企業の海外活動を敏感に反映しながら、現在は二年後移設の新校舎に、約十倍の数の児童が通っているという。子供の通学の便を考えると、大勢の滞在日本人がオーバーカッセル区に住むようになった。

人口数十万人のデュッセルドルフには留学生も含めて、一万人以上の日本人が滞在するようになり、日本人コミュニティ内で暮らせば、何不自由なく生活できた。

日本人観光客の多いミュンヘン、ベルリン、フランクフルト等の都市と異なり、同じライン河に面した商都であったが、デュッセルドルフは観光資源には乏しい街で、旧市街には小さな醸造所が林立し、「Antiker (アルトビア)」の試飲が何時でもできたので、滞在者のみならず、此処でドイツビアのファンになった日本人旅行者は多かった。

トーシャ（敏夫）が四歳、十二歳になるま

での八年間、一家はデュッセルドルフ暮らしであった。知人を頼りケルン大に留学した父は、そこで母と出逢い二人は一緒に拳式のため一時日本に帰国した。ドイツ人の母は、日本の生活に殆ど馴染めなかった。トーシャ（敏夫）が生まれて四歳になると、一家はドイツに舞い戻り、デュッセルドルフの日本人コミュニティから離れて暮らした。

隣家のペーターマン一家の先祖はイタリヤ系ドイツ人で、地元の五代続いた名門であった。ペーターマン一家には、雑種のペルシャ猫がいて、五歳の一人娘のシルヴァーナは、長毛の白い猫”ミーシャ”をとてても可愛がっていた。隣人の敏夫のことをトシオと言えず、トーシャと呼んだ。

母親同士が偶然同じケルン出身だった気安さで、家族同士は急速に親しくなり、ドイツの丘と森で、一緒にピクニックを愉しんだりした。敏夫の一家は始め、オーバーカッセル区の日本人コミュニティに住まなかったが、日本生まれのトーシャ（敏夫）は、六、九歳の間、態々デュッセルドルフの日本人学校に通った。ケルン寄りに転居後は、ドイツ文化をぜひ体験させ、完全なバイリンガルに育てたいとの母の願いもあり、中学校は十二歳までギムナジウム(高等中学校)に入学し、ドイツ児童に混じって通うようになった。

ライン河沿いの古都ケルンは、デュッセルドルフに車で二十分、電車で三十分の距離にある。水運・鉄道・道路の要衝で、人口百万

人のドイツ第四の由緒ある都市である。

ケルン大聖堂は、完成までに六百年を要したという逸話を残し、近くで振り仰げば、その威容に日本人観光客は誰しも驚かされた。百~~ハル~~を越す双塔とゴシック様式の大聖堂、ケルシエと言う地ビール、ケルニツシュ・ヴァセルの香水、仏語のオーデコロン(ケルンの水の意発祥の地として有名である)。

デユツセルドルフと異なり、ケルンには日本人だけのコミュニクティも無く、一家は自然とドイツに溶け込んでいた。

日本人コミュニクティに暮らさない敏夫の生活は、言葉を身体で覚えた実感があつた。毎日学校から帰ると、白いペルシヤ猫の”ミーシヤ”を抱いたシルヴァーナがいた。何時の間にか、敏夫の愛称トーシヤが定着し、敏夫一家もシルヴァーナと言わずにシルヴァーナまたはシルヴィーと呼んだりした。

おしゃまな一人娘シルヴァーナは、三歳年長の大好きなトーシヤ(敏夫)のお嫁さんになるんだとママに何時も言っていたし、トーシヤ(敏夫)のママにもそれを頼んだ。

隣家の猫の”ミーシヤ”と戯れながらシルヴァーナと、ドイツの丘や森で遊び暮らした幼児時代の記憶が、ドイツ生活そのものとして、帰国後も敏夫の脳裏に鮮明であつた。

突然、職人風の男から声を掛けられた。

「学生さん！ 人工呼吸のやりかた知ってるかね。」

「えっ、ハイ……」

ジン、コウ、コキ、ユウと頭の中でトーシヤ(敏夫)は反芻したが、とっさに日本語の意味が理解できなかった。でもその切羽詰った皮ジャンパーの男に促されて、何となく駆けた。駆けながらやつと意味がのみ込めると、ドイツの体育の授業でやった人工呼吸法を頭の中で思い出していた。

小さな池に続く小道を曲がると、数人の人だかりをみた。その中の一点が急に膨らみ、もう一人の職人風の男が走り寄ってきた。

「この学生が人工呼吸できると。」
「そうか！ おれ、ポリ公と医者を呼んでくるで。後をたのむ！」

ペイント缶を付けたオートバイが一台、その周りに二台の自転車があつた。油の付いたボロ布が燃されていて、そこから黒い煤けた煙が初夏の空にゆらゆらと昇っていた。その傍らに、下半身を職人の印半纏でくるまれた、素裸の小さな女の溺水者がいた。

職人は、青いビニールシートを広げて、小さな少女をその上に抱かかえると、仰向けに寝かせた。兄妹とおぼしき連れの兄は、びしょ濡れの洋服からぼたぼたと水滴を滴らせながら、泣きじゃくっていた。兄妹して沼にはまつたところを、通りかかりの二人の職人に救助されたのだ。

「ピーピー泣くんじゃない！」

トーシヤ(敏夫)を連れてきたそのペンキ職人は、容赦なくその兄を怒鳴りつけた。その

の子はすっかり怯えて泣くばかりだった。

職人が顎をしゃくる様にして、人工呼吸を始めるように促した。トーシヤ(敏夫)は、職人の自分に向けられた好奇の目に不安を感じる余裕もなく、ドイツで習ったとおりに開始した。

初めは、テンポが次第に速くなってしまつてうだつた。何回も気を取り直すと、初めのゆっくりとした調子に戻るよう意識した。

「アインツバイドライ・アインツバイ」

肩甲骨の下方に両の掌を溺水者の頭の方向からあてがい、腕を伸ばしたまま自分の体重を少し両腕に掛ける。次に掌を離して女の子の両腕を静かに心持ち上げるように手前に引く、胸郭を広げるとともに、呑み込んだ水の吐出をも同時に促すこの方法を、ただ五秒間に一動作と心に念じながらひたすら続けた。

当時、トーシヤ(敏夫)がドイツの九年制のギムナジウム(高等中学校)で習った方法は、現在のようなマウス・ツィー・マウス方式の人工呼吸法ではなかった。

トーシヤ(敏夫)は続けながら自分の心臓の鼓動を聞いていた。十分もやると、極度の緊張と、そばのボロ布の燃える熱気で、全身に汗をかいた。寝かされた幼い物体の女の子の頭部付近、青いブルーシートの向こうに、ドイツの森で見覚えのある草花が、風に揺られて咲いているのをトーシヤ(敏夫)は意識した。

草花の名前は思い出せなかった。

その草花は、高さが20〜40センチで、昔から信州の安曇野地域に咲く、筑摩^{ちくま}薄荷^{はせが}であった

た。原産は、地中海沿岸の常緑多年草で、別名西洋またたびともいう。五、八月に赤紫色の斑点のある白い花を咲かせる。藤色から紫色の花を付ける亜種もある。松本の城山の野山にも、こうした白や紫の花を付ける筑摩薄荷が、生えていたとしても別段不思議ではない。

「アインツバイドライ・アインツバイ」

女の子は、時々音を立てて水を吐いたが、意識は回復しそうになかった。傍で見守る二人の職人の無知さ加減や無責任な発言がトーシャ（敏夫）を苛立たせた。ドイツの学校で体育の時間に覚えた人工呼吸法は、《ただひたすら単調に繰り返す》、少しだまって欲しいと怒鳴りたかった。

「もうちょっと早くしたらどうだい」

「まだダメか・・・顔が白いな」

「このまま お陀仏かな」

時折発する「ゲー」という肺から洩れる呼気の兆候がトーシャ（敏夫）を勇気付けしたが、一刻も早く警察官と医者が出て欲しいと祈った。人工呼吸を続けながら、トーシャ（敏夫）はラベルのボレロの単調なフレーズの繰返しを思い浮かべていた。

ドイツのギムナジウム（高等中学校）で人工呼吸法を学んだ時、何故かこの曲が鳴っていたのを思い出したからだ。トーシャ（敏夫）は馬鹿になつてその曲を心で感じていると、繰り返す動作がリズムに慣れるような気がして落ち着けた。

「アインツバイドライ・アインツバイ」

「アインツバイドライ・アインツバイ」

白い柔らかな小さな女の子の肌が次第に赤みを増し、小さな背中が擦られるたびに垢となつて剥がれてきた。その赤い肌上によれた垢が、黒点や黒い棒がころころと転がった。医者が看護婦を連れて車でやってきた。

二人ともチラリと赤毛のトーシャ（敏夫）

に好奇の目を向けたが、女の子の瞳孔と肛門を調べると、そのまま続けるようにトーシャ（敏夫）を促した。

警官が野次馬を連れてやってきた。

警官は事務的口調で、発見者の職人二人に救助状況を聴取した。医者が女の子に腕に強心剤をうった。女の子の母親が血相変えて、毛布を持つて飛んできた。

「いま、動かしたら駄目！」

医者の鋭い叱責の音が飛んだ。

仕方なく母親は、持参の毛布を女の子の小さな尻に掛けた。若いその母親のすぎるような視線に、それでいて未経験のトーシャ（敏夫）を責めるような必死の一瞥の祈りがあった。野次馬の声が耳に入った。

「女学生ですか？」

「いや、そうではないですよ、女の子

五、六歳の・・・」

「自殺ですか？」

「まさか」

「人工呼吸やっている外人ですか？」

「学生らしいですよ。近くの松本F校の・・・」

かつてな野次馬の憶測にトーシャ（敏夫）は苛立った。女の子の弱く柔らかい肌が破れて薄つすらと体液が沁みだしてきてきた。その内に母親の祈りの声が聞こえてきた。

観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、
照見五蘊皆空、度一切苦厄、舍利子、
色不異空、空不異色、色即是色、空即是色、
受想行識亦復如是、舍利子、是諸法空相、
不生不滅、不垢不淨、不增不減、是故空中・・・

手を合せて瞑目しながら、母親が唱える低い般若心経の読経が、今迄知らない日本の奇妙な呪文の言葉に聞こえて、トーシャ（敏夫）を苛立たせた。この初めての体験とも言える、不思議な母の祈りの言葉を聞いていると、まるで自分が女の子に罪を犯しているような錯覚を覚えた。母親の咳くような祈りの言葉は、何度となく繰返された。

何百回もの摩擦の繰返しで、幼い肌がペロリと剥けて捲れ上がるのではないかと不安になつた。取囲む野次馬の視線は、トーシャ（敏夫）を敵視しているかのように思えた。

女の子の小さな裸に、トーシャ（敏夫）は、ペーターマン家のおしゃまで愛くるしいシルヴァーナの裸の姿を重ねていた。

ドイツの幼年時代の想い出が鮮明に蘇ってきた。それは、白いベルシャ猫の”ミーシャ”が、あの草を食んで恍惚となつて興奮する姿であった。

ドイツ人は散歩の好きな国民である。

街から一步離れると直ぐ、平地や丘陵部に森や林が点在し、森林浴が誰でも気軽に楽しめる地形のためである。このあたりが、山間部に森や林が開ける日本の地形とかなり異なり、ドイツ人にとって丘や森に遊ぶ感覚は、散歩そのものであったからである。

ラテン語シルヴァ (silva) は、森、林、果樹園等を意味する言葉である。つまり森は豊穡の象徴で、アメリカ Pennsylvania (ペンシルヴァニア) やルーマニア Transylvania (トランシルヴァニア) は、「豊穡な土地」由来の地名であろう。若者向け日本車に同名を冠した車が存在するが、この女性名シルヴィアに、一体どんな願いを込めたのか命名者に聞いて見たい気がする。

トーシャ (敏夫) は捕虫網と虫取り籠を、シルヴァーナは白い愛猫、ミーシャ “を抱いていた。帽子を被つて家をでると、何時ものように雑種のペルシャ猫と共に、森へ連れ立って遊びに出かけた。

二人はまるで兄妹のようだった。

二人にとって、ペーターマン家の猫の”ミーシャ”は、愛玩動物というよりは、言うことを聞かない親友のような存在であった。非社交性や非日常性は、森に連れて行く度に、二人に新たな発見をもたらしてくれた。

ある時は、森の天才的なバレエのダンサーのように振付で、ある時は、芝居の演技者の

ような見事な所作で”ミーシャ”は遊んだ。

腹を二人に見せて両足を上げる。後足で立ち上がり、空中の見えない鳥を捕獲するようにジャンプする。横歩きする。辺りを駆け回っていたかと思うと、前足を低くして、地面に待機して身を伏せ、二人の来るの待ち伏せする。二人を見ながら後ずさりする。

今一緒にいたかと思うと、プイとすねたように突然木に登って、姿を消し二人を心配させる。森の薔薇の茂みから、心配する二人の様子をそと窺っている。そして不意に甘えるようにまた姿を現す。時には、毛づくろいをして薔薇の棘に傷ついた身体を舐める。

中でも一番面白かったのは、野草のネペタ・キャタリアに出くわした時であった。

この発見以来、二人は猫の”ミーシャ”の不思議で奇妙な習性を理解したのである。

猫を連れていった理由は、ドイツの森に、ハーブの一種ネペタ・キャタリア(日本名:犬薄荷、はっか別名筑摩薄荷、ちくまはっか英語名:キャトニップ)猫が噛む草の意イタリア中部の町ネペタ由来)が沢山生えていたからである。この植物によって白猫の”ミーシャ”が引起す興奮状態を見るのが、二人にはとても興味深かったからである。

因みに、別名の筑摩薄荷の由来であるが、筑摩は信州の地名である。前述の如くハーブの一種のネペタ・キャタリアと同種同属植物が、長野県の安曇野地域に、薬草として昔から広く分布していたのである。

ドイツの森のネペタ・キャタリアは、ミン

トに似て、猫に催淫効果をもたらすが、猫の万能薬として、鎮痛、消炎、特に消化管の痙攣から起る下痢止めとしても使われた。

猫の”ミーシャ”は、森のネペタ・キャタリアに近づくと、匂いをかぎ、なめ、くちやくちやと噛み、頬を擦りつけ、その上を転げまわり、草を地面から引き抜き、貪るような食べて、揚句の果てに尿をかけた。

この草によって引起される猫の興奮状態、恍惚状態を眺めていると、猫の快感が二人にも伝染し、幼いながらに生物本来所有の、原始的な催淫効果を起させていたのである。

猫の”ミーシャ”のその光景は、二人を何時も興奮させたが、意識して別な遊びに気持ちを転換しなければいけない罪悪感を感じさせた。

「トーシャ ほら！ 蝶々・・・」

それは綺麗な羽のバルナシウスというアゲハの一種だった。シルヴァーナはリボンの付いた帽子を脱いで何処までも追い駆けた。

「だめだったら、シルヴィー！ いま探つてやるよ。みるー逃げちゃったじゃないか。」

トーシャ(敏夫)は、アゲハ蝶をとってシルヴァーナに与えた。眼前に突き出されたアゲハ蝶は、シルヴァーナの指の中で鱗粉を輝かせて羽ばたいた。その時、トーシャ(敏夫)は、幼い女の子とも思えぬ、シルヴァーナの残虐性をみた。その残虐性は、猫が狩をする時の姿に似ていた。前足の爪で獲物の鼠を押さえつけ、もう片方の前足でなぶるように獲物と遊ぶ猫の”ミーシャ”そのものだった。

突然蝶の腹を指でぐいっと押さえた。

その腹が裂けて黄色と、青いにゆるにゆるとした粘液に構わず、二枚の羽根を筆取り取ったからだ。虫取り籠の中に仕舞うと得意顔でトーシャ(敏夫)を見上げていった。

「蝶々って羽根だけが綺麗だね。」

「.....」

手についたねばねばの黄色の液を服で拭くと、あげは蝶の胴体をかまわず捨てた。

二人は手をつないで、声高らかに歌った。パパとママがするように、ダンスのステップを踏みながら、トーシャ(敏夫)もふざけて小さなお姫様の手をキスして頬擦りして抱きしめた。シルヴァーナもキスを返して、トーシャ(敏夫)にしがみ付いた。

「トーシャ 大好き!!」

女の子の唇に「ホー」と息が戻ってきた。

「もう少し、頑張ってくれよ。」

医者(敏夫)の励ましの言葉をトーシャ(敏夫)は聴いたような気がした。今にも吹っ切れてしまいそうで、これ以上の神経の緊張には耐えられそうになかった。女の子の肌は柔らかでそして赤く、黄色の体液は生への兆候とともに、薄っすらと膜を張ったようだった。

《とても疲れた!》

医者は母親に向かっていた。

「お母さん、もう大丈夫ですよ。」

「エー」「エー」と「アリガトウゴザイマス」「アリガトウゴザイマス」

母親は何時の間にか般若心経の祈りの読経が止まり、お礼を繰返すばかりであった。

そうだ ネペタ・キャタリアだ!!

思い出したトーシャ(敏夫)の振り仰ぐ視線の向こうに、あの時の草花が揺れる。

白いペルシャ猫の「ミーシャ」の大好きな白や紫の草花が、揺れているのが見える。

赤毛のトーシャ(敏夫)の手の動きに連れて、女の子の肌に赤みがさしてきた。

トーシャ(敏夫)は、疲労を感じながらもシルヴァーナのことを想い出していた。

赤く、白く、肌がむけて体液が黄色く、垢が黒く、転がり、・・・白い肌のパレットの中で色は美しく混合した。絶え間なく動いて混合し、白と赤で、モモ色に、紫色と赤は、赤と黒と白で、柔らかい白い肌の上に線が引かれ、消され、滑って流れた。

「アインツバイドライ・アインツバイ」

すると、混合して一度に飛び込んだ色が、眼前でパット輝き、幻影に感じる紛れもない愛くるしいシルヴァーナの白い肌がそこに現れていた。幻想のシルヴァーナは、やはり、白いペルシャ猫を抱いていた。

トーシャ(敏夫)の気力が次第に萎えた。耳の奥に、母親の読経の声が何時までも響いていた。帰国後のカルチャーショックが、一度きにトーシャ(敏夫)を襲った。

「おい君どうした!? 今僕が代わるぞ!!」

素早く引き継ぎの体制をとって医者は、トーシャ(敏夫)に調子を合わせていた。

「もう少し、ゆっくり、ほら、ワンツウスリー・ワンツウ.....」

「.....」

「そつだ代わるぞ 片方の手!!」

期せずして、敵視していた野次馬のなかから一斉に赤毛の少年トーシャ(敏夫)の健闘を讃える拍手が沸き上がった。看護婦から渡された手拭で、顔の汗を拭くと、生来神経過敏症の上に、一、三日の睡眠不足がたたって、その場にへたり込んだ。

「ホントニモウ、何トイッテ良イヤラ.....オ礼の申シ上ゲヨウモアリマセン.....ホントニモウ.....コノ子ノ命ノ恩人.....デス.....」

赤毛の少年トーシャ(敏夫)は、母親の言葉を半ば放心して聞いているうちに、単身日本に帰国してまるで異国の信州松本のこの地で、始めてやっていけそうな自信めいた嬉しい気持ちに浸っていた。溺れた女の子の兄もやっと笑った。

その後、日本国籍の赤毛の少年トーシャ(敏夫)は、高校をでて上智大学に進学し、上智大学を卒業すると、再び両親の住むドイツに戻っていった。

ペーターマン家の一人娘、シルヴァーナと結婚したかどうかはわからない。

第三話 了

白猫は棘ある薔薇に近づかず.....踏基

参考文献

「奇妙な猫たち」 たなか踏基著 文芸社
「猫、この知られざるもの」 ジョエル・ドウハッス著

(塚田導晴訳) 中央公論新社